

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	セネカにおける哲学的言説とその文体 : マニフェストとその底意
Author(s)	中西, 捷渡
Citation	HABITUS , 27 : 65 - 83
Issue Date	2023-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/53730
URL	https://doi.org/10.15027/53730
Right	
Relation	



セネカにおける哲学的言説とその文体 マニフェストとその底意

中西捷渡

(広島大学人間社会科学研究科博士課程後期)

はじめに

帝政期ローマで活躍したストア派の哲学者ルキウス・アンナエウス・セネカは、主要な哲学的著作を個人に向けた弁論的対話や書簡の形で著した。この形式では、名宛て人が著作外でセネカに対して怒りへの対処法のような個別のトピックに関する相談を持ちかけ、それに応える形でセネカがストア派の観点からアドバイスを贈るという体裁で論述が進行する。セネカの著作スタイルの特徴は、悩みを抱える具体的な個人とのやりとりを想像させつつも、その当人が作中に現れないことにより、特定の個人に対して語られた言葉が直接読者に対して語られたかのような効果をもたらす点にある。つまり、読者は著作を通して擬似的にセネカとの哲学的な対話へと誘われるのである。

セネカの語りは直截で、豊富な具体例のおかげで読者は論旨を明快に読み取ることができる。また、要点を総括する警句を適宜交えることで、読者は議論の骨子を見落とさず容易に掴むことが出来る。このような論述の特徴は、セネカが哲学的な議論に課した要求に由来する。セネカによれば、哲学者は肩肘張らない気安い雰囲気の中、「細工をせず平易に語る (*sermo ... illaboratus et facilis*)」べきであり、美辞麗句や盤外戦は弁論家の領分なのである (*Ep.* 75.1-3) ¹⁾。

しかし、セネカの主張を素直に受け取ると、彼自身がこの要求に背いて執筆しているように見える。というのも、まず、彼が用いる比喩は考えを平板に伝達するのではなく、特定の印象を効果的に惹起する道具となっており、加えて、畳みかけるような短文と要点を印象づける警句も、熟慮よりは情動に訴えかける側面を持っているからである。

そこで、本論文はこの一見したところの言行不一致を、セネカの文体論と哲学著作において占める著者としての彼の役割を手がかりに考察する。本稿ではまず、『倫理書簡集 (*Epistulae Morales*)』においてセネカが哲学の文体において追求すべき理念を述べた書簡 75 と、彼の文体理論が開示される書簡 114 を紹介する (1)。次に、カリグラとフロントー、クインティリアヌスによる評価を手がかりとして、セネカの文体が華美で魅力的なものとして受け止められていたことを紹介する (2)。続いて、セネカの哲学観と文体論のより詳細な検討と著作における彼自身の役割の分析を通して、問題の言行不一致がセネカの哲学的意図を適切に理解すれば解消されることを論じる (3)。

1. セネカにおける哲学と文体の理論

セネカは『倫理書簡集』としてまとめられた、年下の友人ルキリウスとの往復書簡において、哲学はいかに語られるべきかを論じる。

細心の注意を払って話す人など、もったいぶった話し方をしたい人以外にいらっしゃるだろうか。私の話しぶりは、私たちが一緒に腰を下ろしているか、散歩しているのなら、凝ることもなく、気安いものとなるはずだが、手紙もちょうどそのようにしたいと思う。[.....] たとえ議論をする場合でも、足を踏みならすことも、手を投げ出すことも、声を張り上げることもせず、そんなこと

は弁論家に任せておき、私の感じるところを君に届けられれば満足して、それを飾り立てたり卑下したりもしなかつたらう。[.....]これほど大事な問題について語る言葉がやせ細って、ひからびていていいとは思わない——実際、哲学も才覚をはねつけることはない——が、それでも言葉に多くの労力を費やすべきではない。(Ep. 75.1-3)

セネカの考えでは、哲学を語る際には率直に所感を表明すればよい。それゆえ、細心の注意を払って凝った文章を練り上げる必要はなく、意図するところが相手に伝わればそれで十分である。そうすることで、議論のやりとりは気安く落ち着いたものとなり、弁論家のように威圧的な話しぶりやジェスチャーといった盤外戦術は排除されることになる。哲学と表現の粋は矛盾するわけではないが、措辞にかまけて内容への注意が疎かになるようなことがあってはならないのである。

ここからは二つの主要な主張が読み取れる。一つは修辞への没頭に対する戒めであり、そしてもう一つ、その含意としての信実の徳の奨励である。これらの主張はセネカの哲学観を反映したものである。それゆえ、この主張の意義を十全に読み解くには、まずセネカの哲学観を踏まえなければならない。

ストア派であるセネカにとって、哲学とは、幸福——すなわち、世界の摂理とそれを例化したものとなるべき個人の思考が完全に調和した状態——を目指す営みである (Ep. 16)。この状態から逸脱した人々の魂には、情念と呼ばれる摂理と矛盾した思考が渦巻いている。そして、情念は累積的に思考の逸脱を深刻化させ、ほとんど治療不可能な悪徳として定着させてしまう (Ep. 50.4-9)。哲学はこのような情念を抱えた人々に原理論と個別事例への教訓を通して助言を与え (Ep. 48.7, 94.47-51)、知恵という形で摂理を個人の魂において体現さ

せる役割を持っている (*Ep.* 16.3, 92.2-3)。つまり、セネカにとっての哲学は、単なる理論的な探究ではなく、むしろ人格の完成——すなわち徳の獲得——を本義としているのである。

このような哲学観を踏まえると、哲学的議論の目的は迷妄とそれに起因する情念に囚われた魂を治療することにある (*Ep.* 75.5-7)²⁾。それゆえ、弁論家のように非理性的手段を使い、情念を刺激することで特定の考えを信じ込ませる手法は適切ではない。むしろ、議論は努めて平静に、論題に集中して、理性的説得となるように進める必要がある。また、弁論家のような威圧的手法を排除することは心理的安全を確保することに繋がる。これにより、腹藏なく本心を語ることが促され、議論は当事者の抱える困難に寄り添ったものとなる事が期待される。このような問題意識から、セネカは修辞への没頭を戒めるのである。

このことを踏まえて、セネカが要約として提示する警句 (*sententia*) は次の通りである。

私たちは感じるとおりに話そう。話すとおりに感じよう。話を人生と協調させよう。 (*Ep.* 75.4)

ここでセネカの主張は新たな展開を見せている。議論の参加者は、所感を率直に表現するだけでなく、発した言葉に考えを適応させる必要がある。そして、最終的には人生全体における言行一致に至らねばならない。ひとまずこれは、ソロン以来の格言である「発言は生き方を表す (*talis ... fuit oratio qualis vita*)」 (*Ep.* 114.1) を踏まえたものと見ることができる (*DL* 1.58; *Rep.* 400D-E; *Inst. Or.* 11.1.30)。たとえば、奇抜な措辞を好み、繊細すぎて柔弱な印象を与える文体で知られるマエケナスは、私生活においても奇矯な振る舞いを好んだ (*Ep.*

114.1-8, 21)。反対に、統辞は素朴でありながら滔々と淀みなく語るファビアーヌスは、その文体から予想されるとおり生き方においても質実であった (*Ep.* 100, 40.12)。このように、文体は当人の為人を反映するのである。

しかし、セネカの主張は諺に言われているものとは異なり、発言と為人に双方向の適応関係を想定する点で独特な主張となっている。この独自性は、単に文化的伝統や常識的直観に由来するだけでなく、同時にストア派の理論にも基づくものと解釈することで、その意義を十全に理解できる³⁾。標準的なストア派の自然学においては、魂は物理的実体を持っており (*DL* 7.156)、あらゆる感覚知覚は魂に対する物理的作用によって成立する (*DL* 7.52-3)。物理的作用が魂に刻印ないし変形をもたらす (*DL* 7.50)、魂に衝動が生じる。これがわれわれの思考の物理的基盤である。この魂の物理的変化に随伴する形で、われわれの思考は作動している (*SVF* 2.166)。そして、言葉は魂の発声を司る部分によって紡がれる (*DL* 7.110)。この理論を踏まえると、どのような言葉が紡がれるかは魂の状態によって決定されることになり、発言が変わることは魂のあり方が変わることであり、逆もまた然りである。

セネカの更なる主張も、ストア派の自然学を補助線として用いることを正当化する。

人それぞれの行動がその語ることに似るように、言葉の語り方も時として社会一般の風潮を反映する。 (*Ep.* 114.2)

この主張は素直に解釈すると、その社会の言説の好みに個人が迎合することで、文体も変化するということを述べている。しかし、ストア派自然学の文脈に当てはめると、この主張は「語ること」すなわち広義における当人の思考が行動

に与える影響に加えて、社会の規範が思考に及ぼす影響を指摘したものと解釈できる。各人が社会の規範を学習する過程を考えると、そこでは他者の発言を聞く、あるいは視覚によってジェスチャーを認識するといった周囲からの影響があるだろう。そして、これらの感覚知覚が魂に変容をもたらす (*DL* 7.157-8) ことで思考が変容し、思考が変容することで行動も変容するのである。ここで影響を与えるのが墮落した人々であれば、文体や為人も墮落してしまうが (*Ep.* 114.8)、反対に、立派な人々であれば哲学の忠告にも等しい効能を発揮する (*Ep.* 94.40)。

ストア派理論を背景に据えると、セネカの主張は単なる文体論に留まるものではないことが分かる。セネカが入念に整えた文体ではなく、内心を素直に表現する自然な文体を推奨するのは、単に内容に集中し円滑に議論を進めるといった微視的な理由からではない。より巨視的に、文体に拘ることで人格的向上を目的とする哲学的議論が、反対に魂を墮落させてしまうのを防ぎ、ひいては適切な文体の使用により、むしろ「言葉ではなく生き方を推敲し、耳ではなく魂に言葉を書き留める」 (*Ep.* 100.2) ことも視野に入れているのである。

2. 古代のセネカ評

セネカは質素な文体を提唱し、それによって哲学的議論の円滑な進行と、人格的完成を促そうとした。しかし、かく言うセネカの文体は質素とは言いがたい。実際、ローマの修辞学界には、セネカの文体をこれ見よがしに技巧を凝らした歪な文体として批判する風潮がある。

歴史家スエトニウスは『ローマ皇帝伝』のカリグラ帝の項で、彼によるセネカの文体評を紹介している。

カリグラは軽妙で優雅な文体を大いに軽蔑し、その当時最も人気の高かったセネカを、「まったくこれ見よがしの演説そのもので、石灰の混ざらない砂だ」とくさしていたほどである。(*Calig.* 53)

この評価は自身も弁論家であったカリグラがセネカの演説文に与えた評価であり、同様の評価はマルクス・アウレリウス帝の修辞学教師フロントーにも見出せる。フロントーは、警句を求めてセネカを読むマルクス・アウレリウスの選書に苦言を呈する中で、セネカの文体は物事をより奇抜に表現するという特徴をもっており、同じ事柄を手を変え品を変え何度も提示するものであると評している(*Fronto De Or.* 3-4)。それゆえ、フロントーの見解とも軌を一にするカリグラの批判は、個人的嫉妬のみに由来する偏った評価とは言いがたい。

カリグラが罵倒するのはあくまでセネカの演説文だが、この評価は彼の他の文章にも当てはめることができるだろう⁴⁾。というのも、類似した主旨を修辞学者クインティリアヌスによるより包括的なセネカの文体評にも見ることができるからである。

クインティリアヌスはキケロ的な文体を称揚し、当時の墮落した文体を批判している⁵⁾。そして、その墮落の突出した原因としてセネカを指弾する。セネカの文章は、古典的ラテン語散文で愛好された重厚長大な掉尾文のかわりに、時に破格をも駆使した短く印象的な警句を多用することを特徴としており、本人の博識ぶりを遺憾なく発揮したものであったとされている(*Inst. Or.* 10.1.130)。大半の学生たちは当時の流行作家であるセネカの著作を座右の書とし、この魅力的な文体を大いに模倣しようとしていた(*Inst. Or.* 10.1.125)。しかし、学生たちは無批判に模倣しようとしてセネカの欠点までも——むしろ欠点をこそ——再生産してしまっていたのである(*Inst. Or.* 10.127)。若者にお

けるセネカの影響力は、彼が教師として学生の墮落した文体の矯正を試みるとき、個人的な憎悪からセネカを執拗に批判していると思われかねないほどであった (*Inst. Or.* 10.1.125)。それゆえ、クインティリアヌスはセネカの問題点を次のように総括する。

彼が自分の才能によって、しかし他人の判断によって語ってほしかったところでしょう。実際、もし彼がある種のことを軽蔑していたなら、もし彼が歪んだものを熱望していなかったなら、もし彼が持ち前のものすべてを愛好していなかったなら、もし彼が事柄の重みを極小の警句によって打ち拉いでいなかったなら、若者たちの愛好よりもむしろ教養ある者たちの総意によって認められていたことでしょう。 (*Inst. Or.* 1.10.130)

これらのほぼ同時代に行われた評価を踏まえると、セネカの言行不一致を指摘せざるをえない。セネカは対話相手には弁論術から距離を取り、質素な文体で発言するように勧めているにもかかわらず、彼自身が弁論術に耽溺し、念入りに整えられた文体を採用していたのである。

あまつさえ、セネカの文体は時代の好みを反映した、非常に劇的なものである (*Ann.* 13.3) ⁶⁾。伝統的に、弁論が聴衆を説得するためには、三つの要件を満たす必要があると考えられていた。すなわち、主張の真実性を教示すること、好感を獲得すること、情動を惹起することの三要件である (*Cic. De Or.* 2.115, 121, 128, 310)。効果的な弁論とは、教示の意図を前面に押し出し、好感の獲得と情動の惹起は水面下で行うものである (*Cic. De Or.* 2.310)。そして、教示には穏やかさが、好感の獲得には明敏さが、情動の惹起には迫力が適切な要素であるとされる (*Cic. De Or.* 2.129)。これは理性的説得を事とするいわゆるアッ

ティカ風弁論の定石であるが、しかし、帝政期の好みはむしろ好感の獲得と情動の惹起に傾き、アジア風弁論的な迫力と華々しさが期待されていた⁷⁾。つまり、その好みを反映したセネカの文体は、理性的説得よりは感情的説得に適したものだと言える。

この点も考慮に入れると、セネカの言行不一致はますます深刻なものとなる。というのも、落ち着いて質素な文体という理念は合理的説得を企図したものであったにもかかわらず、セネカの文体は多分に感情に訴えかけているからである。この整理が正しければ、セネカがこの理念を提唱した狙いは一体どこにあるのだろうか。次に、この点を検討していきたい。

3. セネカの意図

セネカには、自らは詞藻を凝らした文体を駆使しながら、他人には質素な文体を勧めるという言行不一致が見られた。この問題の要点は、彼が自らの要請に三重に反していることにある。つまり、彼は一見したところ、信念と行動の一致という一般的な要請、哲学はあらゆる学科に優先して学ばれるべきだ、哲学は理性的説得を手段とすべきだという個別的な要請の3つに対して遂行的矛盾を犯しているのである。

では、この不一致はなぜ起こったのだろうか。その理由として、本稿では、セネカが書簡において演じる役割に注目した反面教師解釈を提示したい。この解釈によれば、セネカはあらかじめ書簡内でこれらに対する弁明を準備しており、それによって、読者に対して彼自身を人生の反面教師あるいは哲学の助燃剤として提示し、彼の到達点を越えた更なる高みへと至るよう促すというメッセージを込めていると理解することが出来る。

まず、言行一致の一般的な要請に対する弁明を書簡から再構成したい。この

弁明の核心は、セネカは『書簡』における自身の位置づけを哲学の先輩としており、賢者とは位置づけていない点にある。ストア派の言う賢者は極めて高遠な理想的人物であり、セネカは賢者に向かう3つの修養段階のうち最初の段階に数えられれば御の字であると述べている (*Ep.* 75.15)。これは、大きな悪の大半からは自由であるが、いまだに信念と実際の言動には不整合が見られる段階である (*Ep.* 75.14)。彼はこれまでの紆余曲折を経て、老年も過ぎ去ろうかという段になって辛うじてこの境地にたどり着いたのであり、自分の修養に頭打ちの感を抱いている (*Ep.* 8.3, 27.4, 76.5)。そして、この文通において、セネカは自分を棚に上げて医師のように——すなわち賢者のように——振る舞っているのではなく、悪徳の治療法を気心の知れた相手と分かち合い、助言を通して自らを見つめ直していると理解するよう求めている (*Ep.* 27.1-2)。つまり、『書簡』におけるセネカは、自らも修養する傍らで有望な後輩に目をかける先輩なのである。

セネカのこの自己提示は、言行不一致への一つの弁解として機能する。賢者に近づくにつれて言行は調和していくため、彼がより先の段階に到達していれば、言行不一致は問題となっただろう。しかし、彼はいまだに信念と実態が完全に一致する段階まで歩みを進めていない。しかも、政界引退後の老境に至って未だにその段階なのだから、現役時代に言行不一致が認められるのは当然である。この仕掛けは、言行不一致の問題に一定の解決を与えるとともに、求道の哲学者と辣腕の政治家という二つのイメージを逆手にとって、血の通った人物像へと纏め上げる一手として機能している。

ここでさらに、セネカが哲学の無条件的優先性についての要請に対して用意した弁明がつけ加わる。哲学において弁論術の使用が許容される条件について、セネカは次のように主張する。

雄弁が苦もなく手に入れられる場合、[.....] 雄弁を傍らに置いて何よりも美しい仕事に従事させるがいい。雄弁の本性は、自分自身よりもむしろ題材を明らかにすることにあるべきだから。[……] 言葉のことで手いっぱいだった？ もし題材が十分なら、さっそく喜びたまえ。さて、君がそれほど多くの〔語るべき〕事柄を学ぶのはいつになることだろうか。(*Ep.* 75.5-7)

セネカが弁論術の使用を認める条件は、まず、弁論術の使用によって主題をより明確に伝えられることである。哲学の本質は見事な語りではなく、語られる主題にある。それゆえ、修辞は主題に奉仕しなければならない。次に、弁論術を利用するために哲学の修養を疎かにするような学習時間が必要ないことである。哲学は幸福という途方もなく高遠な目標を掲げている。そのために要求される時間的リソースは、セネカの余命を遥かに上回り、おそらくルキリウスにとっても過大なものとなるだろう。それゆえ、残りの生涯を弁論術の修行に割く余裕はない。たゆまず哲学に取り組み、少しでも先の段階にたどり着くべきなのである。

ここで「雄弁が苦もなく手に入れられる場合」と条件付けられている点は非常に重要である。自ら述懐するように、セネカは老境にいたってようやく哲学の正道にたどり着き、そこで若干の成果を挙げた。本来なら、この修養は人生のより早い時期から着手するのが望ましい。そして弁論術のような学科は、賢者となった後に余技として身につければ良い。しかし、若き日のセネカが受けた教育は、まったく哲学の正道とは異なっていた。彼が当時熱心に取り組んだのは、弁論術の修行である。このような経緯から、彼は哲学の本義を悟ったときにはすでに高度な修辞学的知識を身につけていた。つまり、セネカは哲学教

育の点から見れば間違った人生を歩んだ結果、苦もなく雄弁を手に入れられるようになってしまったのである。それゆえ、彼自身が哲学を語る際に雄弁に伴侶を務めさせることは、基準に背くものではない。

ここで、もう一つ問題が残っている。弁論術は感情に働きかけるものであり、一般論として、ストア派にとっては非賢者が感情を刺激されることは望ましくないはずである。そこで最後に、理性的説得の要請について検討したい。セネカは感情に働きかける際の条件を次のように指定する。

哲学とは善き助言だ。助言をするのに声を張り上げる人はいない。ときにはそういう、言ってみれば街頭演説を用いるべき場合もある。つまり、迷っている人を後押しする場合だ。だが、目的が学ぶ意欲を起こさせることではなく、学ばせることにある場合は、もっと低く抑えた言葉に頼るべきだ。(Ep. 38.1)

弁論術が哲学に奉仕できるのは、学説を教示する段よりもむしろ、哲学への手引きと学習意欲の維持においてである。学説の教示においては、キケロ流の理知的で低く抑えたアッティカ風弁論が適している。しかし、ルキリウスに必要なのは、哲学への意欲を掻き立て、修養へ向けて励まし合うことである (Ep. 16.6)。そして、そのためには、帝政期の演示的で華々しいアジア風弁論が適しているのである。

この戦略を正当化するのは、ストア派の「善い情念 (εὐπάθειαι)」という概念である⁸⁾。ストア派の「情念」は多義的であり、広義には魂が外部からの刺激を受けることや感情一般を指すが、狭義では、理性に背く感情を指している (SVF3.377)。ストア派が排除するのはこの狭義の情念であり、理性と調和し

た感情は「善い情念」として許容される (*SVF* 3.434, 438, 442)。そして、セネカによれば、人生にとって必要か有益であれば、その情念は許容される (*Ep.* 116.1)。だとすれば、完全な合理性を追求する営みである哲学に対する意欲を弁論によって掻き立てることに問題はない。

この弁明において、セネカは熟慮を迂回して聞き手に干渉する手法を採用する積極的理由を確立している。セネカが哲学の特徴としてあげた忠告とは、教示の補助手段として、注意を惹き付け、熱意を焚き付け、論題を記憶に植え付ける役割を担うものなのである (*Ep.* 94.21, 25)。忠告の持つこのような特徴を最大限に活用することで、ルキリウスの道徳的修養を強力に後押ししているのである。

セネカの著作がこのような意図で行われているとすれば、セネカの文体に対する評価も適切に理解することが出来る。セネカは忠告の重要性を説く中で次のように述べている。

魂はしばしば明白なことにもそ知らぬふりをする。それゆえ、わかりきった事柄に関する認識も、魂に銘記させねばならない。[.....] だから、人は繰り返し記憶を呼び覚まされねばならない。[.....] なんであれ、ためになることは何度も論じられ、何度も取り扱われるべきだ。[.....] 教えられた事柄自体がおのずと大きな重みをもつことがある。とりわけ、詩に織り込まれたり、散文の形でも警句にまとめられたりした場合には特にそうだ。 (*Ep.* 94.25-7)

カリグラ、クインティリアヌス、フロントーの三者が揃って指摘してきたセネカ風文体の問題点は、警句の多用と構文上の逸脱である。また、フロントーによれば、セネカの警句は表現こそ多彩だが内容はかなり重複している。しかし、

この箇所を踏まえると、これらの特徴は全て意図的に行われていることが理解できる。セネカは教示された学説を印象づけるために、警句と反復といった戦略を採用したのである。そして、この戦略は一定の成功を見た。名宛て人ルキリウスを越えて、後代の読者はセネカの記事に心を動かされ、警句を書き写し、模倣し、道徳的指針としようとした。そのときに口を挟んだのは、立派に生きることよりも立派に語ることに専念する修辞学者たちであった。

おわりに

以上の考察では、セネカによる弁論術批判と彼自身の弁論術の広範な活用という一見したところの矛盾を取り上げ、その意図を探ってきた。修辞学者たちが評してきたように、セネカの記事は警句を多用することで印象を強め、特に若く素朴な読者を魅了する。この点を見れば、セネカの記事は哲学に対する読者の熱意を掻き立てるための細工として上手く機能している。ところが、理想的な条件で哲学に取り組んできた者には、セネカのような仕方で雄弁に哲学を語ることは不可能である。なぜなら、理想的な哲学教育において弁論術の学習が解禁されるのは、学習者が賢者の境地に至った後のことだからである。それゆえ、セネカがこのように哲学を語る事が出来たのは、ひとえに彼がこれまでの人生で適切に哲学に携わることができていなかったからである。この点で、読者にとってセネカとは、ストア派理論における頼れる先達であり、哲学教育における反面教師なのである。

【付記】本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2132 の支援を受けたものです。

註

- 1) 引用文は原則として既存の邦訳によるが、必要に応じて修正を行った。各著作に対する略号は、文献の「原典と邦訳」の項に挙げた校訂版の末尾に記した。
- 2) Mouroutsou 2020: 333-4.
- 3) Albrecht 2014: 742-3. ただし、「自然に従え」という理念と結びつけている点で、Albrecht の分析には問題がある。この理念における「自然」は「摂理」の意味で解されるべきである。本稿が指摘するように、この主張はストア派の自然学によって基礎づけられていると見るべきである。
- 4) Currie 1966: 80.
- 5) Dominik 1997: 57.
- 6) ここにストア派の弁論術の理念を読みとることも可能である。Cf. Bartsch 2017: 217-9. しかし、セネカに特徴的なストア派において比喻の使用がとりわけ推奨されているわけではない。Cf. Bartsch 2017: 220-1. また、ストア派の弁論術では、クインティリアヌスの指摘するような破格構文は悪文の特徴に数えられている (*DL* 7.59)。それゆえ、弁論術に関しては、セネカはストア派よりも当時のローマの美意識に依拠していると考えられる。
- 7) Dominik 1997: 58-9.
- 8) Wilson (2010)はストア派の情念批判を感情一般の根絶という意味で理解し、セネカの文体は弁論術とストア哲学のジレンマのうち弁論術を選び取った結果と解釈している。しかし、本稿が以下で指摘するように、この理解は適切ではない。Cf. Wilson 2010: 434.

文献

原典と邦訳

Ailloud, H. (1980) *Vies des Douze Césars*. Vol. 2. Les Belles Lettres. [*Calig.*]

Arnim, H. v. (1903) *Stoicorum Veterum Fragmenta*. Vols. 2-3. Stuttgart. [*SVF*]

- Dorandi, T. (2013) *Lives of Eminent Philosophers*. Cambridge University Press. [DL]
- Hout, M.P.J.v.d., (1988) *M. Cornelii Frontonis Epistulae*. Teubner. [Fronto *De Or.*]
- Reynolds, L. D. (1965) *L. Annaei Senecae Ad Lucilium Epistulae Morales*. Vols. 1-2. Oxford University Press. [Ep.]
- Russell, D.A. (2001-2) *The Orator's Education*. Vol. 4-5. Harvard University Press. [Inst. Or.]
- Slings, S.R. (2003) *Platonis Respublica*. Oxford University Press. [Rep.]
- Sutton, E.W. & Rackham, H. (1984) *De Oratore Book 1,2*. Harvard University Press. [Cic. *De Or.*]
- Wuilleumier, P. (1978) *Annales*. Vol. 4. Les Belles Lettres. [Ann.]
- 大芝芳弘（訳）（2006）「倫理書簡集 2」（『セネカ哲学全集 6』）、岩波書店。
- 大西英文（訳）（2005a）『弁論家について（上）』、岩波書店。
- （2005b）『弁論家について（下）』、岩波書店。
- 兼利琢也（2006）「断片集」（『セネカ哲学全集 4』）、岩波書店。
- 国原吉之助（訳）（1981）『年代記（下）』、岩波書店。
- （1986）『ローマ皇帝伝（下）』、岩波書店。
- 高橋幸宏（2005）「倫理書簡集 1」（『セネカ哲学全集 5』）、岩波書店。
- 中川純男、山口義久、水落健治（2002-5）『初期ストア派断片集』（2～4）、京都大学学術出版会。
- 藤沢令夫（訳）（1976）『国家』（『プラトン全集 11』）、岩波書店。
- 森谷宇一、戸高和宏、伊達立晶、吉田俊一郎（訳）（2016）『クインティリアヌス：弁論家の教育 4』、京都大学学術出版会。

研究文献

- Albrecht, M.v. (2014) 'Seneca's Language and Style', in Damschen, G. & Heil, A. (eds.), *Brill's Companion to Seneca: Philosopher and Dramatist*. Brill: 699-744.
- Bartsch, S. (2017) 'Rhetoric and Stoic Philosophy', in MacDonald, M.J. (ed.), *The Oxford Handbook of Rhetorical Studies*. Oxford University Press: 215-224.
- Bryan, J. (2013) 'Neronian Philosophy', in Buckley, E. & Dinter, M.T. (eds.), *A Companion to the Neronian Age*. Wiley-Blackwell: 134-148.
- Currie, H.MacL. (1966) 'The Younger Seneca's Style: Some Observations', in *Bulletin of the Institute of Classical Studies*. Vol. 13: 76-87.
- Dinter, M.T. (2013) 'Introduction: The Neronian (Literary) Renaissance', in Buckley, E. & Dinter, M.T. (eds.), *A Companion to the Neronian Age*. Wiley-Blackwell: 1-14.
- Dominik, W.J. (1997) 'The Style is the Man: Seneca, Tacitus and Quintilian's Canon', in Dominik, W.J. (ed.), *Roman Eloquence: Rhetoric in Society and Literature*. Routledge: 50-68.
- Edwards, C. (2017) 'Seneca and the Quest for Glory in Nero's Golden Age', in Bartsch, S., Freudenburg, K., & Littlewood, C. (eds.), *The Cambridge Companion to the Age of Nero*. Cambridge University Press: 164-176.
- Graver, M. (1998) 'The Manhandling of Maecenas: Senecan Abstractions of Masculinity', in *American Journal of Philology*. Vol. 119: 607-632.
- Inwood, B. (2005) 'The Will in Seneca', in Inwood, B. (ed.), *Reading Seneca: Stoic Philosophy at Rome*. Oxford University Press: 132-156.
- (2007) 'The Importance of Form in Seneca's Philosophical Letters', in Morello, R. & Morrison, A.D. (eds.), *Ancient Letters: Classical and Late Antique Epistolography*. Oxford University Press: 133-148.

- Mouroutsou, G. (2020) 'Moral Philosophy in the Imperial Roman Stoa', in Arenson, K. (ed.), *The Routledge Handbook of Hellenistic Philosophy*. Routledge: 331-343.
- Setaioli (2014a) 'Epistulae Morales', in Damschen, G. & Heil, A. (eds.), *Brill's Companion to Seneca: Philosopher and Dramatist*. Brill: 191-200.
- (2014b) 'Ethics 1: Philosophy as Therapy, Self-Transformation, and "Lebensform"', in Damschen, G. & Heil, A. (eds.), *Brill's Companion to Seneca: Philosopher and Dramatist*. Brill: 239-256.
- Torre, Ch. (2017) 'Senecan Drama and the Age of Nero', in Bartsch, S., Freudenburg, K., & Littlewood, C. (eds.), *The Cambridge Companion to the Age of Nero*. Cambridge University Press: 137-150.
- Williams, G. (2015) 'Style and Form in Seneca's Writing', in Bartsch, S. & Schiesaro, A. (eds.), *The Cambridge Companion to Seneca*. Cambridge University Press: 135-149.
- Wilson, M. (2010) 'Rhetoric and the Younger Seneca', in Dominik, W. & Hall, J. (eds.) *A Companion to Roman Rhetoric*. Wiley-Blackwell: 425-438.

Seneca on Philosophical Discourse and Its Style: The Manifesto and the Hidden Agenda

Katsuto Nakanishi

Graduate School of Humanities and Social Sciences

(Doctor's Degree Program) ,

Hiroshima University

This study aims to explain the apparent inconsistencies between Seneca's declared requirements for philosophical discourse and his actions. In his *Letters on Ethics*, he characterizes the ideal way of philosophical discourse as frank and sincere, without rhetorical ornamentation. According to him, elaborate compositions are unnecessary; they obscure the matter and, worse, sometimes testify to the author's vices. Nonetheless, his writing style is rather elaborate, rich in proverbs, which makes him appear as the first betrayer of his own manifesto. However, in reality, he observed a hidden agenda, in avoiding fatal violation of the spirit of the manifesto. To elicit the reason for the tension, I focus on two points: the provisos of Seneca's formulations; and the role of Seneca in his own works as a peer advisor and a bad example. This will elucidate the nature of the manifesto as a propaganda for true protreptic eloquence and justify his extensive use of rhetorical maneuvers. He substantially utilizes his alleged status as a failure in the ideal Stoic education to evangelize Stoicism effectively in the guise of the sober proficient.